

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	西村 敦
論文題目	ラッセル哲学研究の諸相		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、第一部「イギリス観念論、論理、記述の理論、自明性」、および第二部「教え、啓示、回心」の二部からなる。第一部(第一章～第四章)では、ラッセル研究において重要と思われる概念や理論を扱い、ラッセル研究に寄与することが意図されている。第二部(第五章～第七章)では、ラッセル哲学の更なる考察をとおして哲学において「大事なこと」とは何かを示し、それによって哲学に寄与することが意図されている。</p> <p>各章の内容は、次のとおりである。</p> <p>第一章「ラッセルの『数学の原理』における命題論とイギリス観念論」では、『原理』の命題論の解明が試みられる。『原理』のラッセルは、マイノンギアンと見られ、「表示について」の記述理論はそのマイノンギアンの存在論を変更するものと見られてきた。しかし、矛盾的对象の扱いからして『原理』のラッセルを単純にマイノンギアンとすることはできず、記述理論はむしろ別の問題を解決しようとするものであったと見られる。ラッセルは関係を持たない多数の個体の存在を認めるという点でブラッドリーと見解を異にしており、「表示」概念が重要視されるようになったのは、むしろ、命題の統一の問題を解決するためであったと考えられる。</p> <p>第二章「対象と論理——マイノングとラッセル」では、マイノングに関するラッセルの考察が取り上げられる。マイノングが「対象」に関心を持ったのに対して、ラッセルは「論理」に関心を持っており、両者の対立はこの異なる関心の衝突であって、局所的な存在論的領域の問題ではない。哲学における論理の重視、論理の活用による哲学的問題の解決(解消)という方針は、初期ラッセルのマイノング批判においてすでにラッセルの基本的な哲学的立場となっていたと見られる。</p> <p>第三章「われわれは「表示について」から何を学びうるか」では、論文「表示について」を取り上げ、それが「分析哲学の始まり」と言われる所以を考察する。この論文は自然言語的枠組みの論理的なそれへの転換と、哲学における論理学の積極的な活用とを開始するものではあるが、その意義はむしろ、〈哲学の問題圏のうちにあると見えるものの一部は哲学以外の問題であり、哲学の問題の解決について他の学の介入を積極的に認めるべきである〉ということを示すところにある。</p> <p>第四章「ラッセル哲学における自明性について」では、『数学の原理』から『プリンキピア・マテマティカ』までのラッセルの「自明性」に焦点を当てる。当初ラッセルは命題の真偽はわれわれの認識とは独立に成り立っているとし、『プリンキピア』では全体の中でうまく機能するかどうかで真偽を判定するといったように、自明性に対する姿勢に変化があったと見られている。しかし、ラッセルは初期に狭隘な実在論に基づく「自明性」の概念を持っていたが、後に柔軟なプラグマティズムに転向したというのではなく、両者は相互補完的であると理解していたと思われる。</p>			

第五章「教え、導くものとしての哲学——初期ラッセル哲学の考察を通して」では、再度ブラッドリーの思想を取り上げる。ブラッドリーの思想は「世界が「一」である」とするものであり、「一」なる絶対者に対するわれわれの思考の不完全さを自覚し、完全さへと近づく道を、彼は教えようとする。これに対して、ラッセルとムーアは、実在を「多」と主張し、以前の「教え」に反対して、〈自らの思考を信頼し、命題の前提を問い、そこから出発可能なテーゼを求めること〉を主張した。いずれも「世界に対する向き合い方」を表現していたのであり、こうした捉え方が哲学運動の解釈にとって有用である。

第六章「光り輝く経験と哲学——ラッセルとヴィトゲンシュタイン」では、ラッセルと前期ヴィトゲンシュタインの比較考量を行う。「神秘」を認めないラッセルとそれを重視する前期ヴィトゲンシュタインの差異は、「光り輝く経験」に関する向き合い方の違いとして解釈される。ヴィトゲンシュタインが「神秘」と呼んだものへの態度はジェイムズが「神秘的体験」として記述したこととかなり重なり合うものであり、『論考』は宗教的な書と見ることができる。ラッセルは、「神秘」を理解できなかったかもしれないし、もしかしたら、何もかも分かっていたあえて「科学的」たろうとしたのかもしれない。

第七章「「指示について」における「根本的誤り」——ラッセルとストローソン」では、論文「指示について」におけるストローソンのラッセル攻撃を取り上げる。ストローソンはラッセルの中に些細な誤りや不整合を見たというのではなく、ラッセルの扱いが「根本的」に誤っていると言う。ここに言う「根本的誤り」とは、歴史的、全体的なものであって、すぐに訂正され、安定した全体の中に取り込まれるようなものではない。ここから、〈われわれには、正しき導き、すなわち師、そして環境が必要である〉ということが導かれる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ラッセル研究への寄与が意図された第一部と、ラッセルを論じつつ哲学とは何かを論じようとする第二部からなる。全体は七章（七つの論文）からなり、それらはそれぞれに、独自の問題設定のもと、一定の成果を示している。

第一章「ラッセルの『数学の原理』における命題論とイギリス観念論」では、『原理』の命題論の解明が試みられている。従来、『原理』のラッセルは、マイノンギアンと見られ、「表示について」の記述理論はそのマイノンギアンの存在論を変更するものと見られてきた。これに対して、矛盾的对象の扱いからして『原理』のラッセルを単純にマイノンギアンと見ることはできず、記述理論はむしろ別の問題を解決しようとするものではなかったかと申請者は考える。その「別の問題」を申請者はブラッドリーの見解との差異に求め、「表示」概念の重視はむしろ命題の統一の問題を解決するためであったとの新たな見解を提示している。

第二章「対象と論理——マイノングとラッセル」では、マイノングに関するラッセルの考察が取り上げられる。マイノングが「対象」に関心を持ったのに対して、ラッセルは「論理」に関心を持っており、両者の対立はこの異なる関心の衝突であって、局所的な存在論的領域の問題ではないと申請者は見る。そして、哲学における論理の重視、論理の活用による哲学的問題の解決（解消）という方針は初期ラッセルのマイノング批判においてすでにラッセルの基本的な哲学的立場となっていたという重要な指摘を、申請者は行っている。

第三章「われわれは「表示について」から何を学びうるか」では、論文「表示について」を取り上げ、「分析哲学の始まり」と言われる所以が考察されている。この論文は自然言語的枠組みの論理的なそれへの転換と、哲学における論理学の積極的な活用とを開始するものではあるが、その意義はむしろ、〈哲学の問題圏のうちにあると見えるものの一部は哲学以外の問題であり、哲学の問題の解決について他の学の介入を積極的に認めるべきである〉ということを示すところにあると申請者は結論し、当該論文を見るための新たな視点を示した。

第四章「ラッセル哲学における自明性について」では、『数学の原理』から『プリンキピア・マテマティカ』までのラッセルの「自明性」に焦点が当てられる。当初ラッセルは命題の真偽はわれわれの認識とは独立に成り立っているとし、『プリンキピア』では全体の中でうまく機能するかどうかで真偽を判定するといったように、自明性に対する姿勢に変化があったと見られてきた。だが、申請者は、ラッセルはこれら二つの姿勢を当初から相互補完的なものと理解していたとし、ラッセル研究に一石を投じている。

第五章「教え、導くものとしての哲学——初期ラッセル哲学の考察を通して」

では、再度ブラッドリーの思想が取り上げられる。ブラッドリーが「一」なる絶対者に対するわれわれの思考の不完全さを自覚させ、完全さへと近づく道を教えようとするのに対して、ラッセルとムーアは、実在を「多」と主張し、以前の「教え」に反対して、〈自らの思考を信頼し、命題の前提を問い、そこから出発可能なテーゼを求めることを主張した〉というのが、申請者の理解である。ここから、申請者は、どちらも「世界に対する向き合い方」を表現していたのであり、この視点が哲学運動の解釈にとって有用であると主張しようとする。

第六章「光り輝く経験と哲学——ラッセルとヴィトゲンシュタイン」では、ラッセルと前期ヴィトゲンシュタインの比較考量を行う。申請者は、「神秘」を認めないラッセルとそれを重視する前期ヴィトゲンシュタインの差異を、「光り輝く経験」に関する向き合い方の違いとして解釈する。そして、ヴィトゲンシュタインが「神秘」と呼んだものへの態度はジェイムズが「神秘的体験」として記述したこととかなり重なり合うものであり、『論考』は宗教的な書と見ることができる。申請者は、こうした考察をもとに、ラッセルとヴィトゲンシュタインの基本的姿勢の差異を見るべきだとする。

第七章「「指示について」における「根本的誤り」——ラッセルとストローソン」では、ストローソンの論文「指示について」における彼のラッセル攻撃を取り上げる。ストローソンがラッセルを「根本的」に誤っていると言うとき、その「根本的誤り」とは、歴史的、全体的なものであって、すぐに訂正され、安定した全体の中に取り込まれるようなものではない。そこから申請者は、〈われわれには正しき導き、すなわち師、そして環境が必要である〉と結論しようとする。

申請者は、例えば第六章のヴィトゲンシュタインの「神秘」をめぐる考察において、主としてジェイムズの宗教思想との重ね合わせを用いるのみで、よく知られているショーペンハウアーとの関係や言語的観念論的解釈、かつてトゥールミンとジャン尼克が提示したような時代環境の中での読み等々について自らの見解を示すことがないなど、原典をさらに読み込み先行研究に十分に立ち入って論を深めるべき部分を特に後半部分において残してはいる。しかし、そうした今後の課題はあるものの、各章における重要な問題提起とそれに対する対処の試みが、課程博士としての一定のレベルにあることは疑いない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行い、それに基づく調整を経た結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成28年2月12日以降